

第1回 「羽田空港航空機衝突事故対策検討委員会」議事概要

日 時：令和6年1月19日（金）13：00～14：20

場 所：国土交通省合同庁舎3号館4階 幹部会議室

出席委員：小松原座長、青木委員、伊藤委員、小林委員、鈴木委員、武市委員、平田委員
福島委員、松尾委員、定期航空協会、日本航空機操縦士協会

議事次第に沿って、事務局から資料の説明を行い、意見交換を行った。主な意見は以下のとおり。

- 今回の事故対策に限定せず、滑走路誤進入防止について全体的な安全対策が重要。
- ヒューマンファクター、運用、技術の問題を一体的・複合的に捉え、解決策を考えるべき。
- 滑走路誤進入については、①許可なく入れない・入らない、②誤進入時の早期の気づき、③速やかな離脱の3段階で対応が必要。
- 短期的には今あるリソースでできることの検討がまず必要。
- 現場の方々の意見を取り入れることや適切な情報発信を行うことも再発防止のためには必要。
- パイロットと管制官間のコミュニケーション齟齬に課題があるのではないか。
- 管制通信の齟齬を防ぐためにはCRM（乗員間のコミュニケーション等）の重要性の再認識と強化も重要。
- 管制処理の効率性を維持しながら、安全性を向上する手法を考えていくことが必要。
- 羽田空港等では管制官が同時に多くの航空機を扱っており、そうした運用実態も踏まえ、管制官の業務負担が増えないような安全対策を検討することが必要。
- 混雑空港だけではなく、地方空港についても安全対策を検討する必要性がある。
- 管制官は様々な画面を見て業務を実施しており、情報の一元化等の負担軽減策についても検討が必要。
- 停止線灯は、パイロット側にとっては視覚的にわかりやすいとの評価がある一方、管制官側の操作負担が増え、却ってヒューマンエラーを起こす要因になりかねない点に留意。
- 滑走路・誘導路の使い方や航空灯火の輝度に関する検討が必要。
- ヒューマンエラーは必ず起きるものであり、それが直ちに事故につながらないよう、技術でサポートすることが必要。
- 管制官とパイロットを支援するデジタル技術の開発・導入の検討が、中長期的には必要。
- 管制業務における機械学習等の活用も一案だが、アナログとデジタルのすみ分けが重要。最後は人間の判断を重視すべきではないか。
- 航空運送事業を行う上で安全は存立の基盤であり、航空業界を挙げてこの問題に取り組んでいきたい。

以上